

Duncan Heyward の挫折

肴 倉 宏

Duncan Heyward's failure

Hiroshi Sakanakura

抄 録

自然とそれを覆う闇は、*The Last of the Mohicans* を構成する重要な要素であるだけでなく、作品のテーマを支える重要な意味をも与えられている。自然と闇は、それぞれ、善と悪を象徴的に示している。Magua を悪の化身と理解できない Duncan Heyward は、自分が悪にとりつかれていることにも気づかない。その結果、彼は悪の成すがままにされ、彼は与えられている任務を果たすことができないのである。彼は、闇の中で挫折しているのである。彼の挫折の原因は、合理主義的・博愛主義的キリスト教信仰の枠組みから脱却できないためなのである。

キーワード：ジェームズ・フェニモア・クーパー、「モヒカン族の最後の者」、ダンカン・ヘーワード

(1995年9月1日 受理)

Abstract

The contrast between nature and the darkness covering it constitutes both structural and thematic frames for *The Last of the Mohicans*. Nature symbolizes good while the darkness symbolizes evil. Duncan Heyward, who does not understand Magua as an evil person, is not aware that he himself is possessed by evil. As a result, he is at the mercy of evil and cannot carry out his mission in the darkness. The cause of his failure is that he does not go beyond the framework of rationalistic and philanthropic Christian faith.

Keywords : James Fenimore Cooper, *The Last of the Mohicans*, Duncan Heyward

(Received September 1, 1995)

Michael D. Butler は、*The Last of the Mohicans* (1826) の Duncan Heyward を時間の枠組みの中で解釈している。彼は、*The Last of the Mohicans* をインディアンの消滅、ヨーロッパ諸国によるアメリカの植民地支配の終わり、そしてアメリカの独立という歴史的過程を描いた物語と解釈している。Butler は、アメリカ史という時間の枠組みの中で南部出身の若きエリート Duncan Heyward の役割を捉えるのである。彼は、Duncan について次のように述べている。

Duncan, an orphan, must look to the future for his. With the compressed world of *The Last of the Mohicans*, he is, like the better known Virginian boy, the father of his nation.⁽¹⁾

Butler は、Duncan が物語の中で George Washington のように建国の父の役割を果たしているという。Butler は、Duncan を独立したばかりの若々しいアメリカの輝かしい未来を背負っている英雄的な人物と解釈している。

しかし、Duncan Heyward を闇に覆われた舞台の中で捉え直してみるとどうなるであろうか。Duncan を闇に覆われた舞台の中で捉え直してみると、そこには象徴的な意味を与えられた新しい人間像が浮かび上がってくるように思えるのである。そして、*The Last of the Mohicans* の最初の3章は、Duncan を捉え直す上で重要な意味をもってくるように思えるのである。

Cooper は、最初の3章で Duncan Heyward に与えた意味を明らかにするために必要な準備をしている。まず重要なのは、物語の舞台を設定することである。雄大な自然が読者の眼前に展開する。Cooper は、第1章の冒頭で自然との戦いが敵対するもの同士の

戦いに先立つと述べている。続いて、Cooper は、対決する英・仏両軍の大部隊が広大な森林に飲み込まれている様子を描いて“the forest... appeared to swallow up the living mass which had slowly entered its bosom.” (15) という。⁽²⁾ 敵・味方両軍を飲み込んでしまう自然の広大さが強調されているのである。

Cooper は、自然の物理的な広大さを強調するだけでない。彼は、自然が象徴的な意味をも与えられていることを示そうとする。Howard Mumford Jones は、Cooper のパノラマ的な自然描写が Hudson River School に属すると言われている画家たちの自然描写と共通していることを指摘した上で、両者が描こうとしたことは、“the grandeur of God working in the universe”⁽³⁾ であると述べている。Cooper は、神が自然を通して自らを啓示するということを示そうとしたのだ。従って、Cooper の描く自然は、それを見る者の心の中に“the awe or humility”⁽⁴⁾ をもたらすものなのだ。Cooper の描く舞台を構成する自然は、宗教的な意味を持つ信仰の対象とされるものなのである。

神の啓示としての Cooper の自然は、同時に作品の舞台を構成するもう一つの重要な要素である死と闇の覆うところでもある。それは、英・仏両軍が植民地支配の覇を競いあって死闘を繰り広げている“the bloody arena” (12) でもあるのだ。そして、死体が累々と続く森林地帯は、闇に包まれている。Cooper は、森林地帯を“an impervious boundary of forest” (11) や“the interminable forests” (13) と描き、森の中は光を通さず昼なお薄暗いという。Cooper の作品には、物語が夕方から始まって夜へと進むものが多い。*The Last of the Mohicans* でも冒頭の残照が

すぐさま夜の闇にかき消されてしまうことで、森の中はより一層暗さを増す。この点について、Thomas Philbrick は、“almost always Cooper’s protagonists are hemmed in by darkness, mist, or the cover.”⁽⁵⁾と述べている。闇に包まれ死体の転がる森は、まるで墓場のような不気味な様子をしているのである。

Cooper は、死臭を漂わす闇を一人のインディアンと結び付けて描いている。読者は、このインディアンの名前が Magua であると知らされるのだが、彼は物語が始まるとすぐに大自然の舞台上に登場するのである。夕暮れに Edward 砦に “the unwelcome tidings” (17) をもって現れたこのインディアンは、これからすぐに訪れる不吉な闇の前触れなのである。Cooper は、この男と闇の結び付きを強調する。この男の表情は、闇のように暗い。そればかりか、Magua の表情の暗さは、見る者にただならぬ嫌悪感すら与えている。Cooper は、彼の表情を次のように描いている。

The colours of the war-paint had blended in dark confusion about his fierce countenance, and rendered his swarthy lineaments still more savage and repulsive, than if art had attempted an effect. (18)

Cooper は、Magua の暗さが顔にぬった絵の具の効果だけによるものではないという。こうして、Cooper は、Magua の表情に浮かぶ暗さがこの男の本質に根ざしていることを暗示している。

Cooper は、物語の進行につれて Magua の本質を読者に明らかにする。そして、彼は舞台を包む闇の性質を明らかにしてゆくのである。Magua は、倫理的に墮落したインディ

アンとして描かれている。彼は、白人と接触し “the fire-water” (102) を飲むことを覚え、“a rascal” (102) になり下がったのだ。文明と接触し宗教的な意味を与えられている自然との関係を失ったことが、彼の墮落の原因なのである。やがて、Magua は、大虐殺を引き起こした首謀者として読者の前に現れる。第17章の William Henry 砦の虐殺の場面は、イギリス軍の将兵とともに婦人や子供までがインディアンに殺された歴史的に有名な事件である。Cooper は、この事件と Huron 族を結び付ける。Huron 族が大量殺戮を行ったのだと言う。そして、Cooper の Magua は、Huron 族を操って彼等にイギリス軍の将兵と婦人や子供を襲撃させ虐殺させたのである。森林地帯に転がる死体は、血に飢えた Magua の暗躍の結果なのである。Magua は、“the dusky savage the Prince of Darkness, brooding on his own fancied wrongs, and plotting evil” (284) なのである。Magua は、悪の化身なのだ。大自然という舞台は、倫理的腐敗を隠蔽し悪の跳梁を許す象徴的な意味を帯びた闇に覆われているのである。

Cooper は、まず初めに物語の舞台を設定した。宗教的な意味が与えられた自然は、背後におしやられその表面を倫理的腐敗を隠す闇が覆っている。Magua が君臨する舞台は、James Franklin Beard がいうように “his [man’s] fallen state”⁽⁶⁾ なのである。こうして、Cooper は、これから闇に覆われた舞台上で起こる事柄にまつわる問題の中心が悪の認識に関するものであることを暗示するのである。

Duncan Heyward が倫理的腐敗を隠し悪の跳梁を許す闇に覆われた舞台上に登場する。“the Royal Americans” (38) の少佐である

Duncan は、Alice Munro と Cora Munro を Edward 砦から Munro 大佐のいる William Henry 砦まで護衛する任務を与えられているのだ。Duncan たち一行が Edward 砦を出発するとすぐに、暗い顔をした Magua が現れ先頭に立ち道案内をする。Duncan は、イギリス軍の味方である Mohawk 族と共にいるという理由で Magua を“our friend” (21) と考え、全幅の信頼を置いて道案内を任せるのだ。

しかし、Magua に対する Duncan の全面的な信頼は、間もなく揺らぎ始める。Duncan は、目的地の William Henry 砦に夕方までに着く予定で Edward 砦を出発した。ところが、砦についても良さそうな頃合いになっているにもかかわらず、William Henry 砦に着かないのだ。彼は、夕暮れが迫って一層暗さを増した森の中をさまよっているのである。そのため、彼は、Magua を疑い始めるのだ。彼は、イギリス軍の味方のふりをし砦に案内すると見せかけて実は敵のフランス軍に引き渡す腹積もりではないかと Magua を疑うのである。彼は、心のなかをよぎる疑いを森の中で偶然会った Natty Bumppo に次のように話す。

I confess I have not been without my suspicions, though I have endeavoured to conceal them, and affected a confidence I have not always felt, on account of my companions. It was because I suspected him [Magua], that I would follow no longer; making him as you see, follow me. (39)

Duncan は、Magua を信用できない男と感じ始めているのである。

Duncan の Magua に対する姿勢は、彼と Magua の対話を通してさらに示されてい

る。Huron 族に襲撃され一時的に捕虜にされたとき、Duncan は Munro 姉妹を Magua から解放しようと努力する。彼は、Munro が娘たちをとっても愛していることを話してきかせ娘たちを解放したら Munro が多額の報酬を Magua に払うだろうという。彼が説得していると、Magua の顔に喜びの表情が浮かぶ。Duncan は、Magua が娘たちを解放したときに得られる金品のことを思い浮かべてほくそ笑んでいると解釈する。だが、説得を続けていくうちに、Magua の表情が“fiercely malignant” (101) になり、Duncan は Magua の喜びの表情が“some passion more sinister than avarice” (101) からくるものと考えざるを得なくなる。彼は、Magua を貪欲なだけの男ではないと感じるのだ。彼は、Magua が計り知れない倫理的腐敗と破壊のエネルギーを秘めた男と感じ取るのである。彼は、Magua の本質に迫る鋭い感受性をもっている。しかし、このことから彼が Magua を悪の化身と認識していると直ちに断定するのは早計である。

Magua に対する Duncan の捉え方を理解するには、Duncan と Magua の対話にさらに注目して見る必要がある。Duncan は、Magua を説得し続ける。しかし、Magua は途中で彼の説得をさえぎり Cora を呼んでくるように Duncan に命令する。彼は、Magua が報酬の約束を Cora に確約させようとして Cora を呼ぶように命じたのだと解釈するのである。Cooper は、Cora に Magua の命令を伝えにゆく Duncan を次のように描写している。

Duncan, who interpreted this speech to express a wish for some additional pledge that the promised gifts should not be withheld, slowly and

reluctantly repaired to the place where the sisters were now resting from their fatigue, to communicate its purport to Cora. (101)

Duncan は、Magua を悪の化身としてではなく多額の身代金をせしめようとする貪欲な男と判断している。

Duncan の Magua に対するこの判断は、彼が Cora に与える忠告を通してさらに強調されている。彼は Cora に次のように忠告している。

You understand the nature of an Indian's wishes. . . and must be prodigal of your offers of powder and blankets. Ardent spirits are, however, the most prized by such as he; nor would it be amiss to add some boon from your own hand, with that grace you so well know how to practice. (101-102)

Duncan は、ふんだんに弾薬や毛布を与えると約束するように忠告している。彼は、Magua を欲深い男と考えるばかりで悪の化身と判断できないのである。彼は、Magua の本質を感知する鋭い感受性をもっている。にもかかわらず、彼が得たデータから引き出す結論は、Magua の本質に迫るものではないのだ。彼は鈍感な男でもない。しかし、彼は、Magua を悪の化身と認識できないのである。

Magua を悪の化身と認識できない Duncan は、Cora の黒髪に与えられている象徴性を深く理解できないのである。Cora は、“The tresses of this lady were shining and black, like the plumage of the raven.” (150) と描かれている。彼女は、白人の父 Munro と黒人の血を引く母との間に生まれ

た混血の娘なのである。しかし、Cora の黒髪は、人種的特徴を示すだけでなく象徴的な意味をも与えられている。彼女の黒髪は、Magua の暗さに象徴的に示された悪を生まれながらに持っていることを表している。実際、彼女は、Alice と自分を対比して次のように語る。

That I cannot see the sunny side of the picture of life, like this artless but ardent enthusiast. . . is the penalty of experience, and, perhaps, the misfortune of my nature. (150)

Cora は、人生の暗さしか見えないのは生まれながらの不幸のためであるという。彼女は、人間性の拭い去り得ない一部として悪を生まれながらに持っていることを自覚しているのである。彼女は、悪の化身 Magua の圧倒的な力にねじ伏せられて人間性を内側から蝕まれ絶望の淵にいたのである。しかし、Magua の暗い顔を見ても悪の化身と認識できない Duncan は、Cora の黒髪を見ても彼女が悪のために苦しんでいることを理解できないのである。

Cora の黒髪に与えられている象徴性を深く理解できない Duncan は、彼女の黒髪に人種的特徴を見るのである。南部出身の Duncan は、黒人に偏見を抱いている。Munro は、Duncan が黒人に偏見を抱いているのではないかと彼を問い詰める。Duncan は、Munro に対して、“Heaven protect me from a prejudice so unworthy of my reason!” (159) と口では答えるけれども、Cooper は、Duncan を “at the same time conscious of such a feeling, and that as deeply as if it had been engrafted in his nature” (159) と描き、Duncan の心のうちを読者にかいまみせてくれる。彼は、口で言

うのとは裏腹に偏見を抱いているのである。この様な Duncan は、Cora の黒髪に人種的特徴を読み取り、彼女を蔑むのである。彼が Cora の愛の告白を拒否したのは、彼の偏見からなのである。

ところで、悪の化身 Magua は、人の心を自分の思い通りに操る手段として偏見を利用する。彼は、友好的でない Delaware 族を味方にしようとして彼等に次のように語りかける。

The Spirit that made men, coloured them differently. . . Some are blacker than the sluggish bear. These he said should be slaves; and he ordered them to work for ever, like the beaver. You may hear them groan, when the south wind blows, louder than the lowing buffaloes, along the shores of the great salt lake, where the big canoes come and go with them in droves. Some he made with faces paler than the ermine of the forest; and these he ordered to be traders; dogs to their women, and wolves to their slaves. . . Some the Great Spirit made with skins brighter and redder than yonder sun. . . and these did he fashion to his own mind. He gave them this island as he made it, covered with trees, and filled with game. (300-301)

Magua は、白人や黒人よりもインディアンこそが神の心にかなうものとして創造されたという。そして続けて、彼は、インディアンの中でも Delaware 族が特に神に愛された部族であるという。彼は、民族感情を巧みにくすぐり Delaware 族を味方につけようとするのである。彼は、Delaware 族だけでなく

Huron 族も操る。Magua は、彼を部族から追放した Huron 族の民族感情をくすぐり彼等を支配し白人に対する敵愾心をあおり立てるのである。Huron 族が Duncan たちを執拗に襲撃するのも Magua の爽やかな弁舌に唆された結果なのである。Magua が利用する偏見は、白人がインディアンや黒人に対して抱いている偏見を裏返しにしたものである。

Duncan は、Cora を黒人の特徴を持つものとして彼女を蔑んでいた。彼は、Delaware 族や Huron 族と同様に人種偏見に囚われている。そのことは、Duncan もまたインディアンたちと同じように悪の化身 Magua に操られていることを示している。しかし、Magua を悪の化身と認識できない Duncan は、自分が Magua に操られていることにも気が付かないのである。彼は、知らず知らずのうちに彼の心の中に忍び込み人間性を内側から荒廃させている悪の化身 Magua の暗い姿に気が付かないのである。彼は、自分が悪に蝕まれているという自覚を持たないのである。この様な Duncan が悪に蝕まれ苦しんでいる Cora に共感するのは、至難の技といえよう。

そればかりか、悪に蝕まれているという自覚を持たない Duncan は、悪の化身 Magua の成すがままにされてしまうのである。彼は、悪の化身 Magua に暗い森の中に引きずりこまれそして置き去りにされてしまうのである。途方にくれる Duncan は、暗い森の中で偶然会った Natty Bumppo に “desert me not, for God's sake! remain to defend those I escort, and freely name your own reward!” (45) と頼み込むのである。Duncan は、Alice と Cora を William Henry 砦まで護衛する任務を与えられていた。しかし、彼

は、その任務を果たせないのである。Michael D. Butler は、アメリカの輝かしい未来を担う人物として、Duncan を解釈していた。しかし、闇の中で捉え直してみると、Duncan は自分に与えられた任務を全うできない無能な男として浮かび上がってくるのである。彼は、倫理的腐敗を隠し悪の跳梁する闇の中で挫折しているのである。

Duncan の挫折の原因をさらに究明するためには、少し視点を変えて Duncan の Uncas に対する姿勢に注目する必要がある。Uncas は、メシヤなのである。⁽⁷⁾ 彼のメシヤ性は、物語の前半部で宗教的な意味を与えられた自然との係わりで描かれている。彼の完璧な肉体・音楽的な声・鹿のような躍動的な行動力は、宗教的な意味を与えられた自然に対する Duncan の姿勢を示すことになるのである。

Duncan は、Uncas を第 6 章冒頭で初めてみるのである。彼は、たいまつ明かりに照らし出された Uncas を見て強い印象を受けている。“the uncorrupted natives” (53) によく見られる “the perfection of form” (53) を見慣れている Duncan にしても、“an unblemished specimen of the noblest proportions of man” (53) と描かれた Uncas の完璧な姿に感動を覚えるのである。Duncan は、Uncas から受けた印象を次のように Alice に語る。

This, certainly, is a rare and brilliant instance of those natural qualities, in which these peculiar people are said to excel. . . Let us then hope, that this Mohican may not disappoint our wishes, but prove, what his looks assert to be, a brave and constant friend. (53)

Duncan は、完璧な肉体をした Uncas をメシヤと認めるのである。彼は、Uncas を通して宗教的な意味を与えられた自然の完全さを認識するのである。

さらに、Duncan は Uncas の善意を体験を通して知るのである。Duncan は、Huron 族に襲撃され殺されかけるのだ。Uncas は、Duncan が危機にさらされているのを見ると自分の命の危険を顧みずとんで行き Duncan を助け出すのだ。危ういところを助けられた Duncan は、Uncas に次の様にいう。

he has saved my life in the coolest and readiest manner, and he has made a friend who never will require to be reminded of the debt he owes. (73)

Duncan は、Uncas の善意に感謝しているのである。彼は、この体験を通して Uncas が人を裏切ることのない友であることを再確認するのである。彼は、Uncas を通して宗教的な意味を与えられた自然に善意を感じ取るのである。

Uncas に善意をみる Duncan は、彼自身善意の人として描かれている。彼は、自分の命を犠牲にしても Alice と Cora を William Henry 砦にいる Munro のもとに無事に送りとどけようとする。彼は、親しいものにだけ善意を示すのではない。彼の善意は、彼を襲撃する敵にも向けられている。彼は、激流に飲み込まれ押し流されそうになっている Huron 族のインディアンを見るとそのインディアンが敵であることを忘れ助けにいこうとする。さらに、彼は、致命傷を受け苦痛に呻く Huron 族のインディアンに同情して “give him, in pity, give him, the contents of another rifle!” (74) という。彼は、他者の苦痛を見るに忍びず安楽死させよと Natty Bumppo に話しかけているのである。この様

に、彼は、敵・味方分け隔てなく善意を示そうとする。彼の善意に満ちた行為は、隣人愛を語り敵をも愛せよと説いたキリストのことを思い起こさせる。Duncan の行為は、イエス・キリストの教えをそのまま実践したものである。彼は、イエス・キリストの教えを忠実に実践する博愛主義者なのである。善意を行動を通して表すことを旨とする Duncan は、自然や人間の中に悪が存在することを信じられないのである。博愛主義に徹する Duncan は、Magua を悪の化身と認識することができないばかりか自分も悪に蝕まれているという自覚も持てないのである。

Duncan と Uncas の係わりは、物語の後半部でさらに描かれている。Uncas のメシヤ性は、物語の後半部で超自然的な枠組の中で描かれている。超自然的な枠組の核心部に Uncas の死が描かれている。Uncas の死に至る過程は、聖書のイエス・キリストの死に至る過程と重ね合わせて描かれている。Uncas の死は、イエス・キリストの十字架の死を連想させるのである。Uncas の死は、悪の呪縛から人間を解放し魂の負っている傷を癒し人間性を回復させる象徴的な意味が与えられているのである。こうして、Duncan の Uncas に対する態度は、超自然の世界に対する彼の態度を通して描かれるのである。

Duncan の超自然の世界に対する姿勢は、物語の後半部に入っていくようとする Duncan の姿を通して描かれている。物語が後半部に移る直前に Alice と婚約したばかりの Duncan は、悪の化身 Magua によって Alice が連れ去られたことを知ると急いで物語の後半部の世界に入って行き、Magua から Alice を取り戻そうとする。せっかちに “let us proceed.” (189) という Duncan に Natty Bumppo は、次のように忠告する。

Young blood and hot blood, they say, are much the same thing. We are not about to start on a squirrel hunt, or drive a deer into the Horican, but to outlie for days and nights, and to stretch across a wilderness where the feet of men seldom go, and where no bookish knowledge would carry you through, harmless. An Indian never starts on such an expedition without smoking over his council fire; and though a man of white blood, I honour their customs in this particular, seeing that they are deliberate and wise. (189)

Duncan は、これから入ってゆく世界が知識や理性の通用しない超自然的世界であることを理解していない。その上、彼は、Uncas や Uncas の父 Chingachgook の助力を得ないまま超自然の世界に入っていくようとする。実際、彼は、Mohican たちと Natty Bumppo が持つ council fire に加わらず、外から彼等の会議の様子を眺めているだけなのである。Duncan は、物語の後半部の世界を超自然的世界と理解しないだけでなく、そこに入っていく心構えもできていないのである。このことは、Duncan が Uncas の死を通して示されている彼のメシヤ性を理解できないことを暗示している。

Duncan の超自然の世界に対する姿勢は、彼の読解力を通して示されている。超自然の世界の核心部に迫るには、先に入っていく人の残した印や足跡を丹念に拾いその特徴を見分け意味を読み取る必要があるのだ。しかし、Duncan は、残された足跡を見てもその特徴や違いが分からず “One moccasin is so much like another.” (186) という。Natty

Bumpo は、Duncan のこの言葉を聞いて、次のようにいう。

One moccasin like another! you may as well say that one foot is like another; though we all know, that some are long, and others short; some broad, and others narrow; some with high, and some with low, instep; some in-toed, and some out! One moccasin is no more like another, than one book is like another; though they who can read in one, are seldom able to tell the marks of the other. Which is all ordered for the best, giving to every man his natural advantages. (186)

Natty Bumpo は、一つ一つの足跡は独特でそれを残した人の特徴を思い起こさせるという。彼は、足跡に深い意味を読み取るのだ。しかし、どの足跡を見ても同じに見える Duncan は、その足跡を残した人の独特な特徴を読み取る読解力を持ち合わせていないのである。このことは、Duncan がメシヤ Uncas の死を目撃したとしてもそこに深い象徴的な意味を読み取ることができないことを暗示している。

Duncan は、第32章で Uncas の死を目撃する。Uncas は Cora を悪の呪縛から解放し魂の負っている傷を癒し人間性を回復させるために死ぬのだ。しかし、Duncan は、Uncas の死に与えられている象徴的な意味を読み取ることができないのである。彼は、物語の後半の世界の性質を超自然の世界と理解しないだけでなく超自然の世界に入ってゆく心構えも、必要とされる読解力もない。この様な Duncan は Uncas の死を悪から人間を解放し魂の負っている傷を癒し人間性を回復させるための象徴的な死であると理解でき

ないのである。彼は、Uncas の死を最後まで善意を示し続けた模範的なインディアンの美しい死とみているのである。彼は、終始一貫して Uncas を善意の満ちあふれた人間として受けとめているのである。悪に蝕まれているという自覚を持たない彼は、物語の後半部に描かれている Uncas のメシヤ性を理解することができないのである。Duncan のメシヤ理解は、一面的なのである。

Duncan のメシヤ理解を考える上で、物語の時代設定は重要である。物語は、18世紀中葉の1757年に設定されている。ちょうどこの時代は、合理主義者や理神論者がアメリカの思想界に影響を与えていた時代である。この時代の代表的な人物の一人は、Benjamin Franklin である。彼は、自然科学に関心を示すと同時にイエスにまねよと説いた理神論者である。“the Royal Americans” (38) の若き少佐である Duncan は、知識人として描かれている。実際、Natty Bumpo は、Duncan を “he is a soldier in his knowledge, and a gallant gentleman!” (38) と呼んでいる。知識人 Duncan は、Benjamin Franklin のような合理主義者や理神論者と通じ合う精神を共有していると言えよう。Duncan のメシヤ理解は、合理主義的なキリスト教信仰の上に構築されているのである。

Duncan のキリスト教信仰は、彼と Alice との係わりを通してさらに強調されている。Alice は、キリスト教の伝道に熱心な賛美歌教師 David Gamut を “a disciple of Apollo” (24) と呼んでいる。さらに、彼女は、Uncas の完璧な肉体をギリシャ彫刻を觀賞するように眺めている。Cooper は、Uncas を見ている Alice を次のように描いている。

The ingenuous Alice gazed at his free air and proud carriage, as she would

have looked upon some precious relic of the Grecian chisel, to which life had been imparted, by the intervention of a miracle. (53)

Aliceは、Uncasを生きたギリシャ彫刻と見ている。彼女は、DavidとUncasを聖書的イメージで捉えるのではなくギリシャ的イメージで捉えている。古代ギリシャは、合理主義の揺籃の地であると言われている。DavidとUncasをギリシャ的イメージで捉えるAliceは、合理主義的精神の持ち主なのである。このようなAliceは、“her dazzling complexion, fair golden hair, and bright blue eyes”(18)をした娘としても描き出されている。彼女の容貌は、人種的特徴を表しているだけでなく象徴的な意味も与えられている。彼女は、純真無垢なのである。彼女は、悪を知らないのである。悪を知らない合理主義者Aliceは、自然や人間の中に潜む悪を認識することはないのである。Duncanは、Aliceと婚約していたことはすでに述べた。彼は、Aliceと同様に自然や人間の中に悪を見ることができなかった。彼は、合理主義的・博愛

主義的キリスト教信仰の信奉者なのである。

Duncanを支えるキリスト教信仰を物語の時代設定との係わりで考えたけれども、さらに重要なことは、物語が出版された時代である。*The Last of the Mohicans*が出版されたのは、1826年である。この時期は、第2回目の「大覚醒運動」が盛んに展開されていた時期でもある。第2回目の「大覚醒運動」は、18世紀の合理主義的キリスト教信仰が生命力を失っていることを批判することから起きたといわれている。Duncanは、18世紀の合理主義的・博愛主義的キリスト教信仰を自分の支えとしていた。彼が倫理的腐敗を隠し悪の跳梁を許す闇の中で挫折した原因は、19世紀の新しい時代になっているにもかかわらず信仰の活性化をできなかったことにある。彼の挫折の原因は、合理主義的・博愛主義的信仰の枠組を脱却できなかったことにある。CooperがDuncanの挫折を描いたのは、合理主義的・博愛主義的キリスト教信仰が形骸化していることを言いたかったからであろう。

注

- (1) Michael D. Butler “Narrative Structure and Historical Process in *The Last of the Mohicans*” *American Literature*, 48 (1976) 132
- (2) James Fenimore Cooper *The Last of the Mohicans; A Narrative of 1775* (Albany: State University of New York Press, 1983) 本論中の作品からの引用は、全てこの版による。なお、() ないの数字は、そのページを示す。
- (3) Howard Mumford Jones *History and The Contemporary: Essays in Nineteenth-Century Literature* (Madison: The University of Wisconsin Press, 1964) 72
- (4) Donald A. Ringe *The Pictorial Mode: Space and Time in the Arts of Bryant, Irving and Cooper* (Lexington: The University of Kentucky, 1971) 44
- (5) Thomas Philbrick “*The Last of the Mohicans* and the Sound of Discord” *American Literature*, 43 (1971) 31
- (6) James Franklin Beard “Afterword,” *The Last of the Mohicans* (New York: New American Library, 1962) 424
- (7) 拙論 「時間の中心 Uncas—クーバーの描いたメシヤ像—」 大阪女学院短期大学紀要第19号 (1988) 87-103